

## デュラス夫人『ウーリカ』と 『エドゥワール』における海、島<sup>1</sup>

田 戸 カンナ

### はじめに

ブレストの地に生まれ、ニースの地で息絶えたデュラス公爵夫人(1777~1828)、すなわちケルトのことばで言うところのアルモール(Armor)、「海の国」で生まれ、紺碧海岸で没したデュラス夫人はその生涯において数回大海原を横断し島にも滞在した人であった。大革命下1793年に父親ケルサン伯爵が斬首されると、夫人は母親とともに海路フィラデルフィアを經由してマルチニーク島へ渡り、そこで財産の処理にあたった後、再びアメリカを經由してヨーロッパ大陸に舞いもどっている。その後デュラス夫人は亡命者としてイギリスに渡ってロンドンに居住の地を見出し、執政政府期に再びフランスに戻ってくる。

そもそもデュラス夫人は生まれた家系の観点からしても海、島と極めて関りが深く、ケルサン家は海洋一家と言っても決して過言ではないほどである。デュラス夫人の父方の祖父、ケルサン伯爵はブルターニュ地方の貴族であり、十五歳の時から海軍に身を投じて数々の遠征に参加し、最後には司令官として1759年に海戦のさなか、まさに海上で命を落としている。その息子たち、すなわちデュラス夫人の父親と叔父もまた海軍に属していた。夫人の叔父、ギー・ピエールは海軍大佐、海軍准将の位を得ており、港町アントワープの海軍軍管区司令長官の任にも就いた人物である。デュラス夫人の父親、ケルサン伯爵はその父親と同様十五歳にして海軍に入り、その後海上で華々しい活躍を見せてフランス海軍の中で最も有能な士官とまで評されるに至り、海軍少将にも昇進している。父親ケルサン伯爵は海軍の任務を遂行するだけでは飽き足らず、海軍に関する理論的考察を物し、それを政治の場で公にした人でもあった。彼は憲法制定国民議会に海軍再編の計画を提出しており、国民公会議員となってからは海軍に関する諸々の問題に取り組み、その報告書をいくつも作成し提出している。付言すると、彼はルイ16世に死刑が宣告された後に辞職するまでの間、立法議会、国民公会を通じてジロンド派の議員であったのだが、このことも海と決して無関係ではない。というのも、ジロンド派は大港湾都市の銀行家や商人の利害を代表するグループだったからである。そもそも「ジロンド派」(Girondins)という名称はジロンド県、すなわちフランスの主要な港町の一つ、ボルドーをかかえる大西洋沿岸の県の出身者が多いことに由来しているのであって、例えばガデ、ジャンソネといったジロンド派を代表する議員はジロンド県出身である。

デュラス夫人の父方だけでなく母方の家系もまた海、島との関りが濃厚である。母親はマルチニーク島生まれのクレオールであり、この家系の中にはウィンドワード諸島の総督をしている者もいた。そして、デュラス夫人の父親と母親はマルチニーク島で出会っており、二人はそのウィンドワード諸島の総督、デヌリ伯爵の仲立ちで結婚している<sup>2</sup>。

デュラス夫人は文学史で取り上げられることの少ない、いわばマイナーな作家であるが、それでも

確実に今日に至るまで研究が積み重ねられてきたし、研究に値する作家である。しかしながら、デュラス夫人はこれほどまでに海、島と縁が深かったにもかかわらず、これまで夫人の作品が海、島の観点から深く掘り下げて考察されたことはないようである。本稿では、夫人の生前に出版された小説二作、すなわち発表当時、海賊版、翻訳を除いて七千部も売れ一大流行を引き起こした『ウーリカ』（1824年刊）及び数箇国語に翻訳されるほどの成功を収めた『エドゥワール』（1825年刊）について海、島を中心に考察したい<sup>3</sup>。

## I 脚光を浴びる海、島

デュラス夫人が生まれる少し前から二作品を執筆した頃まで、すなわち18世紀後半から19世紀はじめにかけては、世界のさまざまな海、そしてその海に浮かぶ島々に人々の視線が注がれた時代であったとすることができよう。18世紀のとりわけ後半からヨーロッパ人は太平洋の調査を本格的に推し進めるようになり、イギリスは1764年から1766年にかけてジョン・バイロンを、1766年から1768年にかけてサミュエル・ウォリスを派遣し、バイロンはデザボワントマン諸島、ロワジョルジュ諸島を、ウォリスは1767年にタヒチ、ワリス諸島を発見している。ジョン・バイロンとサミュエル・ウォリスによる地理上の調査はジェームズ・クックによって引き継がれ、クックは1768年から1771年、1772年から1775年、1776年から1779年の三回にわたって太平洋を探検して、ソシエテ諸島、ニューゼaland、マーケサズ諸島、ニューヘブリディーズ諸島、ニューカレドニアなど多数の島を発見、再発見し、すぐれた測量の手腕をもってして地図上に正確に刻み込み、最後には第三回目の大航海で発見したサンドイッチ諸島、つまりハワイ諸島中のハワイ島で原住民によって殺されている。クックの航路調査はジョージ・ヴァンクーバーらによって引き継がれていった。

フランスでも太平洋探検の一大国家プロジェクトが計画され、ブーガンヴィルはルイ15世の支援の下1766年から1769年にかけて世界一周航海をなすとげ、この際にタヒチ、サモア諸島、ニューヘブリディーズ諸島に到達し、ルイジアード諸島を発見し、ソロモン諸島、ニューギニア島沿岸を航海している。ブーガンヴィルの太平洋探検はラ・ペルーズ、ダントルカストー、19世紀に入ってからデュペレラによって引き継がれていった。とりわけクックとブーガンヴィルによる大航海、相次ぐ島々の発見は人々の関心を大いに集めるところとなり（ブーガンヴィルは、タヒチ人アオトゥルーをフランスに連れて帰り、アオトゥルーは1769年4月30日にルイ15世並びに宮廷人たちに紹介され大きな話題となった）、それは例えば『エドゥワール』においてクックとブーガンヴィルが言及され<sup>4</sup>、またスタンダールが『ローマ・ナポリ・フィレンツェ』、『恋愛論』などでタヒチやブーガンヴィル、クックに触れていることから分かる<sup>5</sup>。

英仏両国の太平洋探検における競争は植民地支配における熾烈な争いと結び付いていたのであるが、フランスの一植民地となっていた島で世界史に刻まれる一大事件が起きたのもまさにこの時代のことであった。イスパニョーラ島のサン・ドマングでは、1791年に奴隷の反乱が発生して、これはトゥーサン・ルーヴェルテュールの指導の下独立戦争に発展し、1804年にはハイチの独立が宣言され、1825年にはシャルル10世によってその独立が承認されている。

当時の社会的重要人物の足跡を概観してみても、それは海、島との関りが緊密である点を指摘しないわけにはいかない。言うまでもなくナポレオンはコルシカ島に生まれ、エルバ島を脱出した後はセント＝ヘレナに配流されそこで残りの生涯を終えるというように島と極めて縁が深かった。皇后ジョ

ゼフィーヌもマルチニーク島に生まれ育ったし<sup>6</sup>、大革命期に亡命したルイ 18 世とシャルル 10 世はヨーロッパのあちこちの亡命地を点々としていたが、二人が最後に身を寄せたのはイギリスであった。

また、文学に目を移しても、海、島が重要な要素となっている作品が当時数多く執筆されている。ブーガンヴィルの『世界一周旅行記』、これに想をえたディドロの『ブーガンヴィル航海記補遺』、レチフ・ド・ラ・ブルトヌの『南方の発見』、ベルナルダン・ド・サン＝ピエール作『イル・ド・フランス旅行記』、『ポールとヴィルジニー』、1793 年に共和国劇場で初演され、サン＝キュロットを熱狂させたピエール・シルヴァン・マレシャルの戯曲『国王たちの最後の審判』（この作品は 1793 年に出版され民衆に配布された）、ラス・カーズ『セント＝ヘレナ日記』、ユゴー『ビュグ＝ジャルガル』、メリメ「マテオ・ファルコネ」、「タマンゴ」などを例として挙げるができる。中でも『世界一周旅行記』、『ポールとヴィルジニー』、『国王たちの最後の審判』、『セント＝ヘレナ日記』は大いなる反響を呼び起こし大成功を収めた。加えて絵画の分野で、1819 年にはジェリコーの『メデューズ号の筏』、1824 年にはドラクロワの『キオス島の虐殺』が注目的となり論争を引き起こしたことも忘れてはならない。

## II 海

このような背景のなかで制作された『ウーリカ』と『エドゥワール』においては海、島は無視できない要素となっている。二小説ではあたかも作者デュラス夫人の人生と重なるかのように、海がはじめと終わりを縁取っており、二作品は海にはじまり、海に終わるといった様相を呈している。『エドゥワール』ではまず「序」においてフランスから新大陸方面へ向かって進む商船を中心に大西洋が描き出され、エドゥワールが書いた手記の終わりではロリヤンに停泊している商船の背後に海が暗示されている。「結び」ではフランスからアメリカに輸送された新聞、士官のアメリカからフランスへの帰還が広大な海が存在を思い起こさせずにはおかない。一方ウーリカはセネガルの港での出来事から自身の生い立ちを語り始めるし、この作品の終わりでは、「あれほど多くの嵐の後にやってきた安らぎに私は驚いていました。誰かが河岸を荒らすあの急流に逃げ道をつくってくれて、その時その急流は静かな流れを穏やかな海に運んでいました<sup>7</sup>」という具合に、海はウーリカの心をあらわす比喻の形をとって読者の眼前に出現する<sup>8</sup>。つまり、『ウーリカ』においては主人公の人生をクロノロジックに見た場合でも、そのはじめと終わりの両方に海が関連していることになる<sup>9</sup>。

上で士官の例に言及したが、二作品には実際に海を渡る人物が数名いる。エドゥワールと士官はロリヤンからボルチモアまで大西洋を幾日もかけて航海するし、士官はエドゥワールの死後フランスに戻る機会を得、その際に再度大西洋横断を敢行する。『ウーリカ』では主人公が大西洋を航海するのはもちろんのこと、……侯爵夫人はイギリスに行くために海を渡っているし、シャルルは兄と教育係と共にやはりイギリスに赴いたと考えられる<sup>10</sup>。

中でも両作品の主人公にあっては、大海を渡ることは単なる場所の大規模な移動であるにとどまらず、決定的で致命的な動作となっている。ウーリカの航海、これは何よりもまず方向、進路の誤りであったことに着目しなければならない。15 世紀前半にポルトガルによってはじめられて以後おおよそ四百年間続いた大西洋奴隷貿易の歴史の中で、18 世紀はその最盛期であり、この世紀には輸送された黒人奴隷全体の約六割に当たる六百万人がアフリカから主に、サトウキビ栽培が最盛期を迎えていたカリブ海植民地やブラジルへと運ばれたと言われる。とりわけウーリカが生まれた 18 世紀後半

には奴隷貿易は勢いを増していき、エリック・ウィリアムズによれば、1780年頃フランスは年平均二万人前後の奴隷を運んだと推定される<sup>11</sup>。ウーリカはもともと紛れもなくこうした奴隷の一人としてセネガルの港からカリブ海域に運ばれるはずであったのだが、大型の奴隷船に乗せられようとしていたちょうどその時、セネガルの総督、B. 騎士に買われフランスへと連れて来られた。すなわちウーリカは大西洋を西の方角に海路移動するはずであったのだが、北へ向かって航海してしまった。換言するならば、三角貿易の別の辺を移動してしまったのである。この航海における方向の逸脱、文字どおり方向転換こそがウーリカの物語の発端であり、それこそが肌の色の相違、異質を生み出すことによって彼女特有の孤独、つまり一生貴族社会に居場所がなく、結婚することも母親になることもできず、仲間がこの世に誰一人いないという孤独、そして許されざる恋、さらには死に至る病を生じさせていく。ここで注目すべきは、ヨーロッパ社会において完全に孤立してしまったウーリカがその深い孤立から解放されるために故郷に帰国することができない点である。

自分の国へ帰してほしいとB. 夫人に言おうと一瞬思いました。しかし、そこでもまた私は孤立してしまっただしょう。誰が私の言うことに耳を傾けたでしょうか。誰が私のことを理解したでしょうか<sup>12</sup>。

というのも、二歳の時からフランス貴族社会で育てられ幅広い教養を身に修めてしまったウーリカは祖国の黒人たちの間に混じってもまたもや異質とならざるをえないからである。つまり、ウーリカの航海は復路を許さないのである。

ところで、ウーリカが自らの深い孤独に気が付いたのは、現実を鋭く衝くのが得意な……侯爵夫人がB. 夫人にウーリカのことを話し出したのを偶然聞いてしまったことが契機となっている。「……侯爵夫人を見ると、夫人が最初に私の運命を明らかにしたこと、あれほど苦しみを取り出したあの苦しみの坑道を夫人が切り開いたことがいつも思い出されました<sup>13</sup>。」この侯爵夫人は後にシャルルに対する恋心を言い当てることによってウーリカの苦しみを一層耐え難いものにし彼女を瀕死の状態へと追いやるのであるが、ウーリカを苦しめる人がこの侯爵夫人であることは注目に値する。というのも、侯爵夫人はイギリスに亡命し、そこからフランスに戻ってきた人だからである。大革命期には迫害、処刑、投獄を恐れて、また自らの名誉を守るため、数多くのフランス貴族が外国へ亡命したのは周知のとおりである。ドイツ諸国、イタリア、アメリカ、ロシア、イギリスなど亡命貴族たちはさまざまな地域へと散っていったのだが、侯爵夫人は中でもイギリスに亡命の地を見出した。すなわち侯爵夫人は亡命にあたって海を渡ったわけである。外国へと逃亡した貴族たちには艱難辛苦が待ち受けていた。彼らはフランスにいた時に所有していた地所を国家に没収されるという憂き目にあったばかりか、総じて亡命地では物質的にも恵まれずに貧しく惨めな生活を強いられた。かのシャトープリアンもロンドンの屋根裏部屋に住んでいた時期もあり、イギリスでは書籍商、フランス語教師、翻訳の仕事で糧を得、時には施しで生活をしのぐありさまであった。

大革命期には亡命者を指し示すのに、当初は動詞«émigrer» [ラテン語の«emigrare» (住処を変えるの意) に由来] の現在分詞が名詞化したことば、«émigrant» が使用されたが、間もなくこれに加えて«émigrer» の過去分詞が名詞化したことば、すなわち«émigré» も使用されるようになった。ジャック・ブーデ著『歴史のことば』によれば、大革命期両者には政治上の問題と密接に絡むニュアンスの差があったという。すなわち、«émigrant» は同じくフランスを出国する人ではあっても、その帰国が期待されていた人であるのに対して、«émigré» はフランスを出国して最終的には外国に

居を構える人というニュアンスを伴っていた<sup>14</sup>。「émigrant」ということばでは事足りずにそれに加えて「émigré」が使われるようになった事実からも分かるように、悲惨な亡命生活は長期化し、亡命者の帰国は容易ではなくなっていった。

しかし、どれほど帰国が困難になろうとも、亡命貴族とはいつの日か帰るべき確固たる故郷を持っている者であり、彼らは帰国してこそ悲惨な生活から脱して亡命以前の生活を、完全にとは言わないまでもある程度回復できるし、没収された地所のうちの未売却分の返還を要求することも、財産、地位をさらに回復する機会をうかがうこともできる。革命の嵐が過ぎ去ると、亡命貴族たちはようやくフランスへの帰還を果たせるようになっていった。……侯爵夫人は確実にそうした貴族の一人であり、つまり彼女はイギリスで数年間過ごした後そこからフランスに向かって再び航海しえたわけである。帰国した……侯爵夫人は亡命以前のように B. 夫人邸に来はじめ、そればかりか亡命前にウーリカの心を傷つけたように、シャルルに対する恋心に言及して再びウーリカの心を乱してかつてと同様その辛辣さを発揮しさえする。侯爵夫人のこうした海路の往復に対比する時、ウーリカの航海はより一層特異なものとしてたちあらわれてこざるをえない。

ところで、航海とは人と人との間に物理的距離を設け、人から遠ざかるのには最適の行為でもある。ヌヴェール夫人との恋が人に知られて夫人の評判を落としてしまったことを知ったエドゥワールは敢て航海のこの力を利用してヌヴェール夫人から隔たり、社交界のならわしに反する身分違いの恋に終止符を打つことに成功する。ウーリカの航海は許されざる愛を生んだのであるが、これに対してエドゥワールは許されざる愛に対する対処法として航海を選び取る。彼にとっては愛を断ち切ること、すなわち渡航は死でしかなく、彼は既に船上で死んだも同然である。「私に言わせれば、私は既に死んだかのようです<sup>15</sup>」と彼は船上で語っている。したがってエドゥワールは生きてフランスの地を再び踏むことはなく、フランスに帰国するのは遺体となつてのことである。

### III 島

では次に、二作品における島について考察してみたい。ウーリカはアフリカ大陸からヨーロッパ大陸に来た後ヨーロッパ大陸を出ることはないのであるが、彼女の人生、そして苦悩は島と決して無縁ではない。当時セネガルではセネガル川河口部の中州、サン・ルイ島が奴隷を積み出す重要な港となっていたため、ウーリカが B. 騎士に買われたのはサン・ルイ島であった可能性があるし、彼女は後にサン＝ドマングにおける奴隷たちの殺戮を知って胸を引き裂かれてもいる<sup>16</sup>。一方、大西洋を航海する際にアゾレス諸島の西を通過することになる<sup>17</sup>エドゥワールは地球儀を前にしてヌヴェール夫人にソシエテ諸島中の島々を描写しようとするし、ある無人島の自然について語って聞かせるうちにその無人島に二人の恋の避難所を見ている。この無人島は出自による分け隔てとは無縁のところである。エドゥワールは以下のように語っている。「『[……] そこでならば自然の財産だけで幸せになれるでしょうし、身分の差も生まれの低さも知ることはないでしょう！ そこでならば愛がつける名前とは別の名前を名乗る必要はないでしょうし、愛する人の名前を名乗って名誉が汚されることはないでしょう<sup>18</sup>！』」そしてエドゥワールはこの無人島をヌヴェール夫人との恋がかなう場として絶えず夢想するようになり、ある時は夫人を伴ってその無人島に逃げることもまでも考える<sup>19</sup>。ウーリカがサン＝ドマングという島の現実を知って心を痛めたのに対して、エドゥワールは島の空想に心の拠所を求め

## イギリス

しかし、数ある島の中でも注目すべきは何と言ってもイギリスであろう。クローディーヌ・エルマンヌが、スーザ夫人の小説、スタンダールの『イギリス通信』、スタール夫人、コンスタンの例を挙げて、「イギリスを称賛することが当世風である<sup>20</sup>」という『エドゥワール』の一節を裏付けるように<sup>21</sup>、デュラス夫人が二作品を執筆していた19世紀はじめ、フランスにおいてイギリスは注目を集めていた。当時フランスで流行した暗黒小説もイギリス文学の強い影響下にあったことはここで改めて繰り返すまでもない。

『エドゥワール』ではミルトンの大天使<sup>22</sup>やエヴァ<sup>23</sup>、マクベス夫人の手についた血<sup>24</sup>、イギリス詩<sup>25</sup>が引き合いに出されるといった具合に、イギリス文学が直接的に言及されている。『ウーリカ』でも主人公は英語を習うし<sup>26</sup>、バイロンの一節がエピグラフに置かれているのは見逃せない。先に述べたように、ウーリカに対峙する人物、……侯爵夫人はイギリスに足を運んでいたし、シャルル、その兄と教育係もまたこの島国に行ったと考えられる。

とりわけ『エドゥワール』におけるイギリスが注目されよう。『エドゥワール』ではイギリスはこの作品の重要テーマである身分違いの恋、階級差と密接に関連している。イギリスは弁護士が尊ばれ、出世できる国として提示されている。フランス滞在中のイギリス大使は次のように言っている。

「弁護士という職業はイギリスでは最も敬われている職業の一つです。[……] この職業は万事に通じていますよ。今の大法官、D 卿は一介の弁護士から出発して、今日では我々の国で最上の地位にいます<sup>27</sup>。[……]」

平民ながら実績がありかつ著名な弁護士、つまり G. 氏とこの職業を引き継ぐことになっていたその息子エドゥワールにとっては、イギリスはまことに頼もしい国である。ドロヌ元帥の社交界に集っていた何人もの外国人が G. 氏ならばイギリスで成功するだろうと口をそろえている。

父の才智がこの日ほど自由で輝いてみえたことはかつてなかった。この晚餐にいた何人もの外国人が称賛の念をはっきりと示し、そしてあのような人はイギリスでは最上の地位を占めるだろうと外国人たちが内輪で言っているのを私は耳にした<sup>28</sup>。

それに G. 氏はわざわざイギリスまで足を運ばなくても、ドロヌ元帥の社交界で、イギリスの司法について話をしただけで、教養に富んだ人士たちからほとんど尊敬の眼差しを受けてもいる<sup>29</sup>。

加えて、一介の弁護士が出世できる島国、イギリスは身分違いの恋、結婚をかなえる国でもある。イギリス大使も先の、弁護士から出発した D 卿に関連してヌヴェール夫人に向かって以下のように言っていたではなかったか。

「[……] D 卿のご息は奥様もご存じの方と結婚なさいました。[……] それはレディー・サラ・ベンモア、つまりサンダーランド公爵の長女ですよ<sup>30</sup>。[……]」

身分違いの恋に悩むエドゥワールにとってイギリスはまさに願いをかなえる国でもある。彼自身イギリスでならば、ヌヴェール夫人との恋がかなうと考えてもいる。というのも、彼はもし仮にイギリスにいたならばヌヴェール夫人をダンスに誘うだろうと言っているし、また「私はイギリスのことを考えていた。[……] そこでならばヌヴェール夫人を征服できるだろうに。七里の距離が幸福と絶

望を分けるのだ<sup>31</sup>」と語っているからである。身分違いの恋の成就に注目する時、イギリスはたしかに地理的にヨーロッパ大陸と近いけれども、その性質は先に言及した、エドゥワールが思い描く遠くの無人島に重なると言えよう。

フランスにおいては不可能な出世も恋もかなえ、身分上の限界を打ち破ることを可能にするイギリスは、しかしながらこの作品においては、同時に身分の低さを露呈する要素ともなっている。ヌヴェール夫人が祝宴でダンスをする姿を見たい気持ちにかられてついに舞踏会に出かけ、そこで自らの地位にふさわしく平民用の席についたエドゥワールは出自を強烈に思い知らされる。

この階段席に着くや否や、私はそこにいる絶望感に襲われた。まわりで聞こえることばが耳ざわりであった。指摘の中にある何か卑俗なもの、何か下品なものに、まるで私がそうしたものの責任を負っているかのように不快感を覚え屈辱を感じていた<sup>32</sup>。

この後エドゥワールはヌヴェール夫人とコントルダンスを踊るのであるが、それを見かけたドロンス元帥は不満の色を表情に浮かべ、エドゥワールは本来ならばこのような場にいる身分の者ではないことを遠回しに指摘する。主人公の身分の低さをあからさまにしたこの舞踏会の主催者、それは他にもない、イギリス大使であった。身分違いの恋が不可能であること、これもまたイギリスという要素によってはっきりとする仕組である<sup>33</sup>。イギリスは先に見たように、身分違いの恋を可能にするという点で無人島に重なる性質を持つてはいるが、しかしながらフランス社交界はこれをそのままにはしておかない。フランス社交界はイギリスを、身分違いの恋を可能にする要素から不可能にする要素へと転じてしまう。

## 終わりに

デュラス夫人の作品は一貫して、貴族社会から除外される異質な者の苦悩、換言するならば異質者を表面的には受け入れても最終的には排除する貴族社会を大きなテーマとしている。ごく狭い貴族社会の閉鎖性を白日の下にさらすためには、海、島によって地球規模の広がりを導入することが必要だったのである。そして海、島から異国ということばを思い起こす時、我々は二作品に当時の流行でもあったエグゾチスムを認めることができる。しかし二作品にあってはエグゾチスムに関しては事はそれほど単純ではない。『エドゥワール』ではアメリカの大地はたしかに戦場として作中にとりこまれてはいるが、固有名が明らかになったアメリカ人の作中人物は誰一人あらわれず、アメリカの大地が描写されることもない。アゾレス諸島については全く描写されず、無人島はわずかに描写されるものの物語の舞台になることはない。イギリスはあれほど言及されながらやはり舞台にはならない。『ウーリカ』ではセネガルでの出来事は語られるものの、それはわずか4行ほどにすぎず、サン＝ドマングとイギリスは描写されることも物語の舞台になることさえもない。ウーリカはたしかにセネガルから連れて来られた黒人ではあるが、フランスに来たのはわずか二歳の時であり、その時からフランスの貴族社会で育てられ教養を身に付けている。ウーリカはフランス化しているのであって、彼女がアフリカのエグゾチスムを十全に体現しているとは言い難くなっている。二作品は異国の存在を欠くべからざるものとして利用しながら、同時に異国の要素の希薄化を推し進めていると言えよう。

そしてエドゥワールはヌヴェール夫人とともに無人島、イギリスに行けば恋を成就することができるかも知れないのにそうはせず、したがって身分違いの恋に悩み苦しみ死に至った。ウーリカもアフ

リカの習慣を身に付けた上であれば、たとえフランスに連れて来られてもあのような孤独を味わうことは決してなかった。デュラス夫人のテーマ、貴族社会から除外される異質者の苦悩、それはエグゾチスムの希薄から来る個人の苦悩でもあったのである。この点において二作品はエグゾチスムを極めて特異なやり方で導入した小説であると言えよう。こうした点に着目すると、二作品は単なる感傷小説として片付けられなくなってくるのではないだろうか。

## 註

- 1 本稿は、2007年11月11日に関西大学にて開催された日本フランス語フランス文学会2007年度秋季大会において、「特異なエグゾチスム——デュラス夫人『ウーリカ』、『エドゥワール』における海、島をめぐる」のタイトルで筆者が発表した論考に加筆・修正を施したものである。
- 2 デュラス夫人は夫、デュラス公爵との不仲もあってシャトーブリアンに心を奪われていき、その傾倒ぶり、献身ぶりは並々ならぬものであったのだが、夫人が傾倒したシャトーブリアン、この人もまた海、島と関りが深く、その関りようはデュラス夫人の場合と似た面を持っている。シャトーブリアンもやはりブルターニュ地方の港町サン＝マロ、つまりアルモールに生まれており、パリで亡くなるものの、遺言に基づいてサン＝マロの岸に面した小島、ル・グラン・ベに埋葬されているのは周知のとおりである。彼の父親も海と関る仕事に従事しており、海上貿易に手を染めてもいた。また、シャトーブリアンはデュラス夫人とほぼ同時期に夫人同様航路新大陸へ渡りヨーロッパ大陸に戻って後、今度は亡命者としてイギリスへ渡っている。シャトーブリアンが1800年5月6日、デュラス夫人が1801年というように、二人は近い時期に海路フランスに帰国している。
- 3 二作品の詳細な出版の経緯に関しては以下参照。Denise Virieux, Introduction à *Olivier*, José Corti, 1971, p. 35.
- 4 Madame de Duras, *Ourika, Édouard, Olivier ou le Secret*, éd. Marie-Bénédicte Diethelm, Folio, 2007, p. 155.
- 5 Stendhal, *Voyages en Italie*, Bibliothèque de la Pléiade, 1973, p. 518; Stendhal, *De l'amour*, Folio, 1994, p. 80.
- 6 ジョゼフィーヌの家族はマルチニーク島と極めて縁が深い。父親ジョゼフ＝ガスパール・ド・タシュールはこの島に生まれているし、母親もこの島の上流社会に属していた。加えてジョゼフィーヌの最初の夫、ボーアルネ將軍もその父親がマルチニークの総督であった時この島に生まれている。
- 7 *Ourika, Édouard, Olivier ou le Secret*, p. 95.
- 8 デュラス夫人は二小説で海の比喩をしばしば用いている。「世界は私の目には際限のない大海のように開かれていました」(*Ibid.*, p. 109), 「私は心をさいなむ想念の海でおぼれ、傷ついているようでした」(*Ibid.*, p. 179) とエドゥワールは語っている。『エドゥワール』では苦しみが海のイメージをとって語られるのに対し、『ウーリカ』では至福が海のイメージを伴ってあらわれる。「私にはジャルルが以前描いてくれたあの至福の海を泳いでいるのが見えました。」(*Ibid.*, p. 88.)
- 9 デュラス夫人は『ウーリカ』、『エドゥワール』の他に『オリヴィエあるいは秘密』という小説を残している。『オリヴィエあるいは秘密』は夫人の生前にはサロンで朗読されはしたが出版されることはなく、1971年になってはじめてドゥニーズ・ヴィリウによってその不完全原稿が出版された。ところが、その後新たに『オリヴィエあるいは秘密』の自筆の完全原稿が発見され、上に言及したフォリオ版『ウーリカ、エドゥワール、オリヴィエあるいは秘密』のかたちでこの完全原稿が2007年に世に出た。完成版『オリヴィエあるいは秘密』でも、海が作品のはじめと終わりを縁取っている。完成版『オリヴィエあるいは秘密』では第1部第III書簡はサンセール伯爵からナンジ伯爵夫人に当てられたものだが、ここでは伯爵が「今度の月曜日にイギリスを離れ」、「パリに戻」ること、つまり伯爵の航海の意図が明言されている。「結び」の末尾においては、C. 侯爵夫人が家族が待つナポリへ戻ったことが語られており、ナポリのことばからそれに隣接する海



が喚起される。

- 10 *Ibid.*, p. 75.
- 11 Eric Williams, *From Columbus to Castro*, André Deutsch, 1970, p. 153.
- 12 *Ourika, Édouard, Olivier ou le Secret*, p. 73.
- 13 *Ibid.*, p. 91.
- 14 Jacques Boudet, *Les mots de l'Histoire*, Robert Laffont, 1990, p. 349.
- 15 *Ourika, Édouard, Olivier ou le Secret*, p. 101.
- 16 *Ibid.*, p. 77.
- 17 *Ibid.*, p. 101.
- 18 *Ibid.*, p. 156.
- 19 *Ibid.*, p. 173.
- 20 *Ibid.*, p. 115.
- 21 Madame de Duras, *Édouard*, Mercure de France, coll. « Mille et une femmes », 1983, p. 136.
- 22 *Ourika, Édouard, Olivier ou le Secret*, p. 101.
- 23 *Ibid.*, p. 162.
- 24 *Ibid.*, p. 178.
- 25 *Ibid.*, p. 162.
- 26 *Ibid.*, p. 69.
- 27 *Ibid.*, p. 140.
- 28 *Ibid.*, p. 123.
- 29 *Ibid.*, p. 115.
- 30 *Ibid.*, p. 140.
- 31 *Ibid.*, p. 142-143.
- 32 *Ibid.*, p. 139.
- 33 身分上の限界を打ち破ると同時に身分上の限界を白日の下にさらす国, イギリス。イギリスのこの二面性は作品のはじめに既にあらわれている。エドゥワールの将来について母親は, ミルトンの詩句「対等でないもの間ではいかなる社会も生じえません」(『失樂園』第8巻第383~384行に手を加えたもの)を英語のまま暗唱してみせ, この詩を盾にエドゥワールが上流社会に足を踏み入れることに反対を唱えた。これに対して主人公の父親は, 同じミルトンの一節を全く異なって解釈することによって, すなわち精神的に対等でない者の間では社会は生まれないと解釈することによってエドゥワールを上流社会に連れていくことに正当性を見出したのであった。( *Ibid.*, p. 111-112.) [なお, ミルトンの詩句の日本語訳にあたっては『ミルトン英詩全訳集』(下)(宮西光雄訳, 金星堂, 1983年)を参照させていただいた。]

## 主要参考文献

### 1. デュラス夫人の作品

- DURAS, Claire de.- *Ourika* / une édition féministe de Claudine Herrmann.- Paris : Éditions des femmes, 1979.- 69 p.
- *Ourika* / présentation et étude de Roger Little.- Nouvelle édition mise à jour.- Exeter : University of Exeter Press, 2005.- XXIV-136 p.- (Textes littéraires ; 105).
- *Édouard* / préface et notes de Claudine Herrmann.- Paris : Mercure de France, 1983.- 138 p.- (Mille et une femmes).
- Mademoiselle de Clermont / Mme de Genlis, Édouard / Mme de Duras* / postface par Gérard Gengembre.  
- Paris : Éditions Autrement, 1994.- 161 p.- (Littératures).
- DURAS, Claire de.- *Édouard* / préface, postface et notes de Claudine Herrmann.- [Paris] : Mercure de France, 2005.- 195 p.- (Le Temps retrouvé).

*Romans de femmes du XVIII<sup>e</sup> siècle* / textes établis, présentés et annotés par Raymond Trousson.  
- Paris : Robert Laffont, 2000.- LXXV-1085 p.- (Bouquins).

DURAS, Claire de.- *Ourika, Édouard, Olivier ou le Secret* / édition intégrale et en partie inédite, présentée, établie et annotée par Marie-Bénédict Diethelm.- [Paris] : Gallimard, 2007.- 402 p.- (Folio classique ; 4559).

## 2. デュラス夫人、『ウーリカ』、『エドゥワール』に関する研究

BERTRAND-JENNINGS, Chantal.- «Condition féminine et impuissance sociale : les romans de la duchesse de Duras». *Romantisme*, 18<sup>e</sup>a., n<sup>o</sup> 63, 1989, p. 39-50.

- *D'un siècle l'autre* : romans de Claire de Duras.- Jaignes : La Chasse au Snark, 2001.- 138 p.- (Critique ; 3).

DECREUS-VAN LIEFLAND, Juliette.- *Sainte-Beuve et la critique des auteurs féminins*.- Paris : Boivin et C<sup>ie</sup>, 1949.- 153 p.

PAILHÈS, G.- *La Duchesse de Duras et Chateaubriand* : d'après des documents inédits.- Paris : Librairie académique Perrin et C<sup>ie</sup>, 1910.- 553- [8] p.

SAINTE-BEUVE.- *Œuvres II* / texte présenté et annoté par Maxime Leroy.- [Paris] : Gallimard, 1960.  
- 1686 p.- (Bibliothèque de la Pléiade ; 88).

SCHELER, Lucien.- «Un best-seller sous Louis XVIII, *Ourika* par Mme de Duras». *Bulletin du bibliophile*, 1988, p. 11-28.

TEZENAS DU MONTCEL, R.- «Madame de Duras, cette inconnue...». *La Revue des deux mondes*, 1<sup>er</sup> août 1968, p. 364-384.

## 3. その他

BAKER, Daniel B.- *Explorers and Discoverers of the World*.- Detroit : Gale Research, 1993.- XLI-637 p.

NOËL, Erick.- «Une carrière contrariée : Alexandre Dumas, homme de couleur et général révolutionnaire». *Études françaises*, n<sup>o</sup> 5, mars 1998, p. 58-88.

*Rétablissement de l'esclavage dans les colonies françaises, 1802* : ruptures et continuités de la politique coloniale française (1800-1830) : aux origines d'Haïti / actes du Colloque international tenu à l'Université de Paris VIII, les 20, 21 et 22 juin 2002.- Paris : Maisonneuve & Larose, 2003.- 591 p.

TAILLEMITE, Étienne.- *Sur des mers inconnues*.- [Paris] : Gallimard, 1987.- 208 p.- (Découvertes Gallimard ; 21 : Aventures).

WILLIAMS, Eric.- *From Columbus to Castro : the History of the Caribbean 1492-1969*.- London : André Deutsch, 1970.- 576 p.

YACONO, Xavier.- *Histoire de la colonisation française*.- Paris : Presses universitaires de France, 1969.  
- 127 p.- (Que sais-je? ; 452).

## 邦語文献

### 1. デュラス夫人

片山正樹「デュラス夫人の『ウーリカ』(一)」, 『人文論究』(関西学院大学人文学会), 第34巻第2号, 1984年9月, 1~11頁。

村田博司「デュラス公爵夫人に関する覚書」, 『研究年報』[日本大学文理学部(三島)], 第28集, 1980年, 273~288頁。

### 2. その他

小川了『奴隷商人ソニエ 18世紀フランスの奴隷交易とアフリカ社会』, 山川出版社, 2002年, III-340-13頁。

中川久定『転倒の島 18世紀フランス文学史の諸断面』, 岩波書店, 2002年, VI-231-XI頁。

深沢克己『海港と文明 近世フランスの港町』, 山川出版社, 2002年, 384-24頁。

(たど かんな 総合教育センター)